



国鉄千歳線沿いに設置された「千歳市北信濃工業団地」のPR看板（昭和40年）
 長野県開拓団が入植した広大な北信濃だったが、現在その町名は第1工業団地とその周辺にわずかに残るのみとなっている

志古津 第22号（最終号）

目次

『新千歳市史 通史編下巻』の刊行に向けて	中村 康文	1
……	……	……
同時代史を考える	田端 宏	5
……	……	……
現代千歳の町名散歩	守屋 憲治	6
……	……	……
『新千歳市史 通史編上巻』を手にすると	田村 俊之	25
……	……	……
『志古津』目次総覧	……	29
……	……	……
あとがき	……	……

表紙の写真他

- (写真) 既刊歴史書（上から）
 昭和24年刊『躍進千歳の姿』
 昭和44年刊『千歳市史』
 昭和58年刊『増補千歳市史』
 平成22年刊『新千歳市史 通史編上巻』
 (イラスト) ママチくん
 真々地のママチ遺跡から出土した土面
 をモチーフにする文化財キャラクター
 キウス周堤墓群の世界遺産登録にガン
 バっている
 (裏表紙) 「字名改正案による管内図（一部）」
 昭和26年「大字名廃止並びに字名改正
 要領」のガリ版刷付図

『新千歳市史 通史編下巻』の刊行に向けて

中村 康文

千歳市総務部主幹（市史編さん担当）

『新千歳市史 通史編上巻』を平成二十二年三月に刊行してから「志古津」の発行や資料の収集など五年の準備期間を経て、本年五月、市総務部に市史編さん担当主幹が再設置され、通史編下巻の編さん作業が本格化するようになった。

編さん方針を決める千歳市史編さん委員会委員には、『新千歳市史』編さん開始当初から「上巻」刊行まで編さん委員会会長を務めた田端宏氏と、それぞれの分野で活躍し千歳地域の戦後史に精通している六人の市民を選

千歳市史編さん委員会委員

役職	氏名	現職	経歴
会長	田端 宏	北海道教育大学名誉教授	
副会長	駒澤 文雄		千歳市副市長
委員	三溝 茂	千開拓協議会事務局	千歳市開拓農業協同組合参事
委員	三上 禮子	書家、NPO法人千歳ひと・魅力まらづくりネットワーク代表	
委員	渡部 徹夫		千歳商工会議所専務
委員	本宮 宣幸	会社役員	千歳市公営企業管理者
委員	橋爪 耐三	千歳温故知新の会代表	会社役員

任し、八月十八日に市長から委嘱状が交付された。

「上巻」は、自然先史、古代、中世・近世、近代の終戦までが領域であったことから、大学の教員や研究者など専門家が執筆者の八割を占めた。

これから編さんにあたる「下巻」は戦後から現在までを領域とするが、北海道史の研究者は多数いるが北海道の戦後史を専門とする研究者は少ないという。

地域の現代史を調べ執筆できるのは、専門家ではなく郷土千歳を知る地域の人々が中心となる。

本市の戦後は、連合国軍の進駐、自衛隊の駐屯、空港の伸展、工業団地の造成など、占領期の混乱から復興、そして目覚ましい発展。さらには支笏湖の国立公園指定や伝統的なアイヌ文化など、「下巻」には他の自治体にはない史実が数多く盛り込まれることになる。

すでに編さん委員会において審議を重ね、編さん事業の基本計画、目次構成、執筆体制などが決められた。執筆は、編さん委員会委員をはじめ、地域史の研究者、市職員・OBなど約四〇人が担い、執筆者の思いが込められ読み手が満足しうる充実した内容とするため、編さん委員及び市史編さん担当者が内容の校正・総括を行いながら、平成三十年度の刊行を目標に編さん作業を進めていく。

「下巻」の編さん基本計画は次ページ以降に記載する。



第1回千歳市史編さん委員会（平成27年8月18日市本庁舎庁議室）

『新千歳市史 通史編下巻』編さん基本計画

はじめに

千歳の歴史が「書」としてまとめられたのは昭和二十四（一九四九）年・開庁七〇年を記念し職員により叙述された『躍進千歳の姿』が嚆矢といえる。

本格的な歴史書としては、昭和四十四年に更科源蔵（詩人、郷土史家）による『千歳市史』、五十八年には『千歳市史』を補完する『増補千歳市史』が長見義三（小説家、郷土史家）によつて叙述された。これら二冊の市史はいずれも開庁九〇年（昭和四十四年）、開庁一〇〇年（昭和五十四年）に絡んで刊行されたものであった。

その後、編さん事業は停止状態となり、資料の収集、保存、整理がなされないまま二〇余年が経過した。

平成十五（二〇〇三）年に至り、二十年の市制施行五〇周年記念事業として『新千歳市史』刊行が計画された。『新千歳市史』は、自然、先史、古代から近代の終戦までを「通史編上巻」、戦後を「通史編下巻」として編さんすることとし、二十二年三月に「上巻」を刊行した。「上巻」刊行から五年にわたる資料収集の期間を経て、二十七年度から「下巻」の編さん事業を本格的に再開すべく市総務部内に市史編さん担当部署が新設されたところである。

「下巻」の領域となる本市の戦後は、他自治体にはない世界史と日本史の混乱といううねりの中で発展を遂げてきた。

昭和二〇年代の連合国軍（米軍）進駐による混乱の時代を経て、三〇年・四〇年代には米軍撤退と自衛隊の来駐、工業団地の造成、空港の発展など、

復興と飛躍を遂げて北海道の中核都市へと成長する。その後も空港の伸展や陸路と鉄路の充実のなかに都市基盤の整備が進み人口も順調に増え続けてきた。さらに、本市ならではの国立公園支笏湖や伝統的なアイヌ文化などの特徴的な歴史が数多くある。

過去から現在へと受け継がれ、積み重ねられた郷土千歳の歴史は、現在から未来に向けての指針となるものであり、今後のまちづくりに資するためこれを「市史」として後世に残さなければならぬと考え、基本計画を策定する。

一. 目的

歴史を著すことは、「事実の累積」を整理し、解釈と評価を加えることである。

どういう事態で、誰がどう考え、誰がどのような選択をしたのか、そこには、人々の息遣いや、地域の風土、あるいは時代のおいといったものがある。

世の中を動かしているのが誰であるかを考え、時代の行方を読み取るのが歴史である。

歴史は、その地域の文化の進歩を計る一つの有力な指標である。歴史を読むことは、その「まち」やそこに住む人を理解する近道である。この「まち」にとつて、そうした歴史を叙述することが編さんの目的とする。

二. 基本方針

(一) 歴史は、直接的に未来を指し示すものではないが、歴史から活力を引き出し、今のわれわれの社会に向けてメッセージを発してくれるものでなければならない。

- (二) 地域には由来と特質においてその地域ならではの固有性がある。地域の固有性は日本列島の歴史過程を反映した普遍性から成り立ち、人々の歩みもその影響下にある。
- (三) 編別構成は部門別とし、一つの項目が時代を跨るのではなく、項目ごとにまとめて時系列にすることで変遷がわかりやすく、読み手が調べやすい構成とする。また、部門別の前段に「概史」を記載し、市史全体の概略とその背景が理解できるようにするため、戦後史を四つの時代に分けて国内外・道内の主要な動きとともに本市の歴史を要約する。
- (四) 千歳の戦後史は、連合国軍の進駐と基地の閉鎖そして要員の大量解雇と振り子のごとく、一方から他方へ極端にゆれ動いた。さらに、満州を失った開拓民を受け入れる「内なる満蒙」、陸空自衛隊の来駐などは世界や日本の政治の潮流と無縁ではなかった。このように千歳をみると戦後の日本が辿ってきた様々な特徴が先鋭的に表出した地域であるといえよう。これらを明らかにすることは、地域史のみならず日本史全体を考える上でも重要である。
- (五) 行政史に陥らず、社会、経済など多角的な視点と、開拓に携わった人々や市民生活の描写に重点をおき、地域の実態や時代の推移を浮かび上がらせ、そのなかで市民が果たしてきた役割を明らかにすることが肝要である。
- (六) 市史編さん事業の意義を広く市民に伝え、情報収集などにおいて市民の理解と協力が不可欠である。一般市民に広く読まれることを目指し、文章表現は平易であることを心がけ、同時に学術的にも高い水準なものを目指さなければならぬ。
- (七) 記述は具体性、客観性をもたせるとともに最新の研究成果を盛り

込む。つまり十分な研究能力を持った者と、地元の状況を詳しく知る人物が連携し研究能力を高めるのも本事業のもう一つのねらいとするところである。

- (八) 原則として平成二十六年度までの事項を掲載するものとする。
- (九) 市制施行六〇周年にあたる平成三十年度の刊行を目途に計画する。

『新千歳市史 通史編下巻』編さんスケジュール

年度	主な事業内容
平成27年度	<ul style="list-style-type: none"> ・市史編さん委員の委嘱 ・編さん基本計画の作成 ・目次構成の作成 ・執筆体制の確立（執筆者の選定）
平成28年度	<ul style="list-style-type: none"> ・調査、原稿執筆 ・執筆の進捗状況確認
平成29年度	<ul style="list-style-type: none"> ・調査、原稿執筆 ・執筆の進捗状況確認 ・原稿の提出 ・原稿内容の調整
平成30年度	<ul style="list-style-type: none"> ・編集、校正、印刷 ・刊行

『新千歳市史 通史編下巻』編さん基本方針実施要領

一．資料の収集、整理及び保存

- (一) 既存資料のデータ化により検索を容易にする。
- (二) 全庁的な協力体制を構築し、執筆、資料提供、情報提供を求める。
- (三) 史料調査、市民からの聴き取り調査などを積極的に行う。
- (四) 個人のプライバシーには充分に配慮する。

二．執筆体制の確立

- (一) 各分野の項目ごとに分担者を決める。専門領域などについては研究者、機関などに協力を求めていく。
- (二) 郷土史、地域文化などの領域については市民の参加を積極的に求める。
- (三) 行政各分野にわたる領域については市職員及び市職員退職者による執筆も不可欠であり、また、執筆に必要な資料は市が保存・保管しているものが多いことから、資料提供について市各部署の積極的な協力を求める。

三．市民との協力

- (一) 市史編さんは、従来行政が主導することが多かった。しかし、これからは市HPや広報誌、各メディア等を通して市史編さん事業の意義を広報し、市民に理解を求め、資料提供、聴き取りなど協力を呼びかける。
- (二) 多くの市民に編さんに関わってもらうために、協力員などの体制

を検討するとともに市民が市史に関心がもてる各種企画を検討し実施する。

四．市民に読まれる市史の作成

- (一) 写真・図版などを活用し見やすいものとする。
- (二) 多様な切り口や環境問題、地域文化など現代的課題にも取り組み、読む者にとつてリアリティー感のあるものとする。

五．編さん基本方針実施計画の策定

- (一) 市史編さん委員会の協議を踏まえ、編さん計画を確定する。
- (二) 執筆者による調整会議を実施する。
- (三) 事務局は実務を進めるに当って、都度編さん委員会に状況を報告し意見を求めていく。

◎戦後混乱期の資料を探しています

『新千歳市史 通史編下巻』編さんに参考となる戦後の混乱期（昭和二〇年代から三〇年代）の街並みなどの写真や新聞・雑誌など、お借りできる資料がありましたらご連絡ください。

千歳市役所総務部主幹（市史編さん担当）

〇二三（二四）〇五二三

同時代史を考える

田 端 宏

千歳市史編さん委員会会長

『新千歳市史通史編上巻』が刊行されて五年余が過ぎ、同下巻の準備が具体的に進行しています。叙述すべき年代は上巻のあとをうけて太平洋戦争の敗戦、復興の年代から現代までを予定しています。いわゆる同時代史を書くことになりません。

同時代史は現在の人々が生きて来た時代そのもの、あるいはそれに近い過去についてまとめられるものです。現代史といわれる歴史叙述と思ってもよいのですが、執筆する人々が生活への密着感のある表現に惹かれてと思われませんが、同時代史と表記した著作等も多くみられます。

三宅雪嶺が大正時代に執筆、発表しはじめて戦後の昭和二十年（雪嶺の没年でもあった）まで書いていたものをまとめて出版した全六巻三二〇〇頁余の大著が『同時代史』でした。第一巻を「万延元年より明治十年迄」と表題し、以下第六巻の昭和二十年まで一年ごとの叙述を連ねています。雪嶺の生没年は万延元年から昭和二十年だったので、執筆者本人の生涯と全く重ね合わせた文字通りの同時代史が書かれたわけです。この『同時代史』は、雪嶺主宰の雑誌『我観』の「同時代観」欄に二〇〇回以上連載したものをまとめたもので、刊行する時に『同時代史』との表題にすることは雪嶺本人の意思だったとされ、昭和二十四年〜二十九年に岩波書店から出版された時の書名は『同時代史』になっていました。『同時代史』は「同時代観」——自分が生きてきた時代をどう見るかをまとめたもの——ということで「大躍進の時代」という見方や「知識が愈々進みて思想の自由之に伴

はず」という時代観が書かれているのです。

『日本同時代史』全六巻（歴史学研究会編集 青木書店一九九〇〜九一年）と名付ける同時代史もあります。この書は東西対立、冷戦構造の変化のなかで日本も高度成長期を経て政治、経済、文化などあらゆる面で大きく変わり「戦後民主主義の空洞化」が言われるようになった時代を戦後の転換期ととらえ戦後の日本史を見直そうという意識で編集されています。各巻は1敗戦と占領、2占領政策の転換と講和、3五五年体制と安保闘争、4高度成長の時代、5転換期の世界と日本、というテーマのもとに各巻七〜八名の執筆者が担当して「国際的連帯・世界的視野、民衆の主體的側面、戦争と平和の問題、経済至上主義批判、マイノリティ（少数派）問題を重視する」見方で戦後史を見直そうとしていたのです。

同時代史もいろいろな見方で書かれるのは当然で、千歳市民の考える同時代観、同時代史が『新千歳市史 通史編下巻』に叙述されることになります。地域固有の問題意識がどんな歴史的経過を踏んできたのか、それを歴史の鑑（かがみ）として生かすことができるかを考えなければならぬと思います。例えば空港の増便、発着時間帯の拡大を考える時、経済活動、観光利便性などの面と騒音問題の面との調整という課題など、多くの人々が関心を持ち、意見を持つてきた事柄の具体的な推移は、そのまま地域の歴史の一面です。その問題処理の経過も歴史の鑑の性格をも持ちあわせるものです。

鑑はお手本という意味ですが、次のように言われることもあります。「歴史の教えるところこそまさに人民や政府がかつて歴史から何も学ばなかったということ」があらわれている、というのです（ヘーゲル『歴史哲学』）。歴史の教訓を生かすということが実際には出来ていないのだと考えるのです。それは、過去の経験を参考にするだけではなく、その時々々の状態にあった方途、あるいはそれを導く理念が必要であるという考え方のようです。やはり歴史の鑑、特に同時代的な歴史の鑑を生かす考え方は重要なのだと思います。

現代千歳の町名散歩

守 屋 憲 治

千歳市総務部主幹付市史編さん担当

はじめに

アイヌの人々は生活の必要性から地形や目標とする場所に行くために多くの地名を用いていた。千歳におけるアイヌ地名については長見義三の『ちとせ地名散歩』のほか、『新千歳市史 通史編上巻』においても「地名解」として解説を加えている。アイヌの人々が用いた地名の一部は、和人の入植後に戸籍と住所の整備＝徴税、徴兵、通信などの必要に応じて村名・区名・町字名として用いられ、一部は現在に至っている。

今、私たちが生活する千歳の街は昭和十四（一九三九）年に日本海軍の航空基地ができ人口が急増、十七年には町制を敷き初の区画整理事業が認可された。戦後は人口の増加に従い市街地が拡大し、社会の必要性から新たな町名が次々と生まれ現在八四、うち住居表示実施地区は三六を数える。

さて、千歳の町字名施行は、町制施行の昭和十七年五月一日、区画整理事業完工時の二十四年五月七日と二十六年五月一日の地方自治法第二六〇条第一項の規定による字名改正の三回といわれているが、資料も少なく町字名のまとまった解説もない。近年の町名は命名当時の住民などが、冗長・難解・類似・印象不良を避けつつ簡明を旨に頭を悩ませ考えたまちづくりの原点ともいえるものである。町域の地形や歴史による執筆者の仮説を含め現代千歳の町名を散歩したい。

註 参考文献は文中『書名』で記した／市街化調整区域の町名を字名とした

／アイヌ語地名解は『ちとせ地名散歩』によった／○丁目は算用数字とした

戦前の大字名

明治二（一八六九）年八月に千歳村、長都村、漁村、島松村、蘭越村、烏柵舞村の六村をもって胆振国千歳郡が編成され、十三年三月には六カ村の戸長役場が千歳村におかれた。この時が千歳開庁となる。三十年、後に恵庭となる漁村と島松村が離脱したが、残った四村は大正四（一九一五）年四月に合併し新生千歳村が開村した（二級町村制施行）。昭和十四年には一級町村制、十七年には千歳町となる。三十三年には道内二四番目となる市制を施行した。

次に掲げる村の名は、明治初年から大正四年までは村名、大正四年から昭和二十六年の間は大字名だった（S26大字廃止）。なお、アイヌの人々は、家が一軒でもコタン（「」で示す＝集落）といった。

千歳村 千歳とは文化二（一八〇五）年に改名された蝦夷地初の和地名、旧名シコツ川大きな・凹地。青葉公園と千歳川左岸支笏火山灰台地に挟まれた一帯を指す。シコツ川に鶴が多く生息していたことから「鶴は千年、亀は万年」の故事から千歳（川）とした。命名は、四年に択捉島紗那がロシアに襲撃された紗那事件敗北の責めで罷免・逼塞となった箱館奉行の羽太正頼。事件を機に問宮林蔵が樺太を探検、島であることを発見した。大正四年からは千歳郡の自治体名となる。昭和八年に村内を千歳、根志越、中央、嶮淵、近唐、幌加、竜丑内、新嶮淵、阿字砂里、長都、釜加、蘭越、烏柵舞、ママチの一四区に別けたという。

長都村 オサツとはオサツナイ（川口・乾く・沢）のナイを省略したものである。江戸期の「ヲサツ」「カマカ（盤・上↓釜加）」からなる。

『千歳市農業協同組合史』には「地下の地層の中にカナ盤のあることが

ら、いつしかカマカと呼んだ」とある。カナ盤とは固い粘土層をいい、その上(カ)にあることからカナカ↓カマカに変化したということか。

「おさつ」は元禄十三(一七〇〇)年に松前藩が幕府に上呈した『松前島郷帳』の中に名がみられる。カマカは明治中期、盤上村と呼ばれていたことがあるらしい。「長都」表記の初出は明治六年の『地誌提要胆振国』といわれる。

江戸期、千歳会所からイザリブトに向かう長都街道があった。これは寛政十一(一七九九)年、シコツ川で獲れたサケを幕府直捌によってイシカリに運ぶことができずユウフツへ運搬するために開削された輸送路であり、現在も富丘の防風林内と都の農家周辺に痕跡を見ることができる。

もと長都村の一部に都がある。明治四十二、三年頃に入植した人々が都のような土地にしようと願って通称された(『北海道地名誌』)。

上長都ももと長都の一部である。明治期には長都川上流部から長都川上、大正期に上長都と呼ばれるようになった。火山灰地で地味が悪く入植者が定住したのは昭和に入ってからのことである(『新市史(上)』)。

村域は現在の長都・上長都・釜加・都・北信濃・桜木・長都駅前・北陽・勇舞・みどり台北・みどり台南である(町字域が千歳村、長都村にまたがる場合は長都村域の大なるものを記載した)。

蘭越村 ランコシ⇨カツラの木・の群生する・所。江戸期は「ランコウシ」といった。ほかに、「アツイシ(⇨アツテウシ⇨オヒヨウの皮・多くある・所)」「マス(ハマナスのみ・群生する・所)」「ルウエン(路・悪い)」のコタンがあったという。明治六年に蘭越村と漢字表記になった。

明治中期、千歳からふ化場までの村道を蘭越街道といい、ふ化場から漁市街までのほぼ真直ぐな一〇^キの山越えを^{ふか}化場道路と呼んだ。

桂の木はアイヌの人々が昭和二〇年代まで河川交通の手段として使った

丸木舟となる大木。また、オヒヨウはアイヌの人々の普段着アットウシの原料繊維となる。平成十二年、支笏湖病院手前の道道改修時、道内では珍しい皇朝一二銭の富壽神寶^{ふじゅしんぼう}が出土し現地見学会に参加した。この地には古代から現在に続く人の営みがあり内地との交流の証だった。

村域は現在の蘭越・桂木・新星となる。

烏柵舞村 原名はヲサクマコマナイ⇨尻・無しの・後ろ・にある・沢

江戸期のコタン「ユウナイ(それ(へび)の・いる・沢)」「ルウエン」「フエラフ(⇨ポロフイラ⇨大きな・激端)」「ヲサクモマイ」からなるという。明治六年、烏柵舞村と漢字表記になった。昭和初期、ふ化場から支笏湖までの村道を烏柵舞道路といった。

烏柵舞は昭和二十六年まで、ふ化場以西から美笛にいたる広大な区域で、王子製紙の発電所、社宅、専用鉄道(山線)、千歳鉦山の社宅、坑外専用軌道などが存在した。千歳管内の山線駅は湖畔、滝ノ上、分岐点、水溜^{みずため}、牛の沢(第二発電所)、第三発電所、上千歳(第四発電所)。坑外専用軌道の駅は川口、八千代、本山。両線ともに軌間は七六二ミリのナローだった。

村域は現在の紋別・藤の沢・西森・水明郷・幌美内^{ほろびない}・奥漂^{おくたん}・美笛・モラツプ^{しまむない}・支笏温泉^{しさむない}・(支笏湖)であった。

註(1) 約四万二〇〇〇年前の支笏火山の大噴火によって流れてきた火砕流堆積物(軽石流堆積物)の分布する火砕流台地。火砕流は札幌から苫小牧の低地帯を埋め尽くした。石山の札幌軟石は火砕流が溶結したもの。支笏火山の噴火によってできたカルデラに水が溜まり支笏湖が形成された(参考・若松幹夫『支笏湖学のすすめ』)。

昭和八年の一四区名

昭和八年、千歳村区設置規程が制定され議会の議決による区名が制定さ

れた（長都、釜加、蘭越は先述）。

千歳 当初の千歳区は字ママチを除く千歳村大字千歳村字千歳村の一部。

昭和十五年九月三十日提出「千歳村区設置規程中改正ノ件」によると改正前の千歳区は字千歳村と字ママチから成っていたものを、第一～三区に分割するものだった。このことからママチ区は八年以降十五年までの間に千歳区に吸収されたものと考えられる。

第一区はママチを含む千歳川右岸区域。第二区は北海道鉄道線上流の千歳川左岸区域、第三区は北海道鉄道線下流の千歳川左岸区域。第一区は川南、第二区は川北、第三区は末広と通称された。

根志越 ネシコシ＝クルミの木・の群生する・所

本来のネシコシは根志越橋の兩岸周辺一帯といわれている。昭和初期にはクルミの木が多くあった。根志越橋左岸にある私立幼稚園は、三十八年に旧名ネシコシの地名を汲んで千歳くるみ幼稚園として創立された。創設者は千歳を知る会創設当初からの会員でアイヌの言葉に造詣が深かった。

中央 オルイカ＝川口・橋、キウス（木臼）＝萱^{かや}・の群生する・所。

カヤはアイヌ住宅チセの主要な材料であった。カヤは軽くチセの骨格に太い木材を必要とせず、ストロー状であることから断熱効果も高かった。

命名の由来は長都沼東岸一帯の中央に位置すること、千歳の農業地帯の中央に位置し全町的な行事である家畜品評会などが毎年開催されていたことによる（『千歳市農業協同組合史』）。

キウス周堤墓群の発見は明治三十四年、当初はアイヌのチャシ（砦）跡とされキウス環状土籬群^{かんじょうどりぐん}と呼ばれた。戦後に縄文後期の墓と認識された。国の史跡指定の際（S54）に形が理解しやすいよう周堤墓と名を改めた。

嶮淵 ケヌフチ＝ハンノキ・群生するもの（沢）・の口

昭和十七年と二十四年の改正においても嶮淵とされたという。嶮淵には

昭和三年に追分郵便局から独立した胆振嶮淵郵便取扱所が開設されていた。嶮淵と類似の地名が上川管内の村名にあった。嶮淵（ケヌフチ・ケンブチ）である。嶮淵村には同音の郵便局があり、このため誤送達が多かった。

昭和二十六年の字名変更は地域の希望によって改正するものであったという。当時、連合会長であった西野郵便局長は誤送達のこともあり改正を提案した。衆議の結果、ケヌフチの名を守りたいとの意見も出されたが、地区には松原温泉、信田温泉があったことから温泉の郷泉郷に変更した（『郷土史ケヌフチ物語』）。富山県からの入植者が獅子舞を伝える。

近唐 コムカラ＝ぐつと曲がる（所）

昭和二十六年の改正で協和となる。命名由来についてはわからない。協和とは和名で「心をあわせて仲よくすること」の意。戦後の緊急入植地として近唐官林も予定地とされた経過がある。このことから、古くから農業を営むものと緊急入植した秋田隊が力を合わせて近唐を開拓することを願ったの命名だったのか。

幌加 原名はホロカケヌフチ＝後戻りする・ケヌフチ川

ホロカケヌフチ川を略しホロカ・ホロカ太とし漢字を当てた。当地にも、後に明石温泉となる保老加温泉が明治期からあったが終戦後に廃業した。

上川管内美瑛の「パッチワークの路」に似た国道337号丘陵地帯は「パレットの丘」として近年、脚光を浴びている。

竜丑内 タツウシナイ＝樺皮・の多い・沢

昭和二十六年の改正で新川と表記された。読み方は『市史』によると当初「しんかわ（S26・4・30『北海道公報』）」とされたという。

昭和二十六年「大字名廃止並びに字名改正要領」には（にいかわ）と読み仮名があることからルビをふった道の公報担当者の誤りであろう。地域の古老も「しんかわ」と呼んだことはないという。

古老によると新川の地名は立山連峰に源を發し、富山県中新川郡を流れ富山湾に注ぐ新川にいかわに由来するという。童丑内には富山県出身者が多かった。

故郷を偲んでの命名である。新川は現在、常願寺川と呼ばれている。

樺皮は灯燭とうしやくの燃料、細く裁断した樺皮を編んで手提げになる。

新嶮淵 シーケヌフチ二本流である・嶮淵川

昭和二十六年の改正時に、千歳地域の最東端に位置し東側の由仁川端、西方向の幌加から見ても丘陵地帯となることから東丘と名づけられたのだろう。五十八年、東部支所が交通便利の良い由仁町の室蘭本線三川駅前から東丘の農民研修センターに移ってきた。町は戦後間もなく、長都とともに室蘭本線追分・三川間の新嶮淵に簡易乗降場新設の請願を行ったが実現しなかった。

阿宇砂里 アウサリ二（ホカンカニ、アウサリ両河川）内・の葭原よしか

現在は鶏卵生産全道一のほか軽種馬、酪農で知られるが、昭和二十六年にアウサリから駒里と改正された。一帯は農地改革による農地解放で入植が始まるまでは小樽・犬上商船の犬上慶吾郎が所有する犬上牧場だった。犬上は北海道鉄道の社長でもあり牧場至近の地に美々駅を設置した。牧場

は鶴川の大河原コピサントクが多い時には二〇〇頭の馬を、犬上も昭和一〇年代に五〇頭ほどの馬を放牧していたという（『市史』）。アウサリ↓牧場↓馬二駒が放牧されていた郷↓駒里が命名の経過と思われる。執筆者をはじめ千歳では駒里こまのさとと呼ぶ人が多いが、「大字名廃止並びに字名改正要領」でも（こまのさと）と読み仮名を付している。

石狩と十勝を連絡する国鉄石勝線開業の暁には駒里駅が新設される運びだったが、単線で優等列車優先から交換のための駒里信号場となった。

美笛↓千歳鉦山 美笛 ピパイ二小石原・だらけの・もの（川）↓「その確証を現場に示すことができぬ弱さがある（『ちとせ地名散歩』）」と

長見は指摘するが、田村俊之は「ピッ・ピナイ二石の多い・谷川↓ピッパイに転化し漢字を当てた」と確証を現場に示した。

昭和八年に金鉦の露頭が発見され、十二年に日本鉦業系千歳鉦山となり本格操業となる。昭和八年に烏棚舞全域が区となっていたが、人口の急増によって十四年にシシャモナイ沢以西が美笛区となる。十五年になると川口から六キ地点二鉦山地区東端の六千で東西に分け、西を千歳鉦山第一区、東を第二区とした。

昭和十七年には人口五〇〇〇人を超えたが、五十二年に職住分離、そして六十一年には休山となった。戦後は三菱金属鉦業の傘下だった。二十六年に字名を美笛とした。人口が多かったことから通称も多く、黄金沢、本山、鳴尾、舞園、旭ヶ丘、福神、草笛、六千などが挙げられる。現在もと鳴尾に苔むした製錬所の巨大なコンクリート基礎が残るばかりである。

支笏湖に流れ込む美笛川という美しい響きの名は近年、支笏湖を含めて千歳川とされた。誰がいつ、美笛川を千歳川としたのかについて河川管理者に訊いてもわからない。何かの理由があるのだろうか。

ママチ ママチ二泉池・だらけの・もの（川）

ママチ山林（泉沢）、ママチ原野（千歳飛行場）、青葉公園中央広場以西から水明郷・藤の沢境界までなどママチ川流域の広大な地域を指す。

昭和二十六年の改正時、南長沼用水路と千歳川に挟まれたママチの一部に漢字を当て真町とし、「しんちよう」と読ませる町名ができた。その後、

昭和四十二年九月二十三日に末広町の一部が末広新町東・中・西・高台となつて新たな町名が生まれた。真町と新町では音が同じで混乱することから真町は青葉公園を除いて、五十四年七月二十三日に住居表示を実施、旧名を漢字化し真々地ままぢとした（『市史』）。区域内にあつた中学校の名称までは変えなかったが平成二十四年三月に閉校、翌年に校舎は再活用され

道立の高等支援学校となった。

千歳の文化財とキウス周堤墓群世界文化遺産登録のPRキャラクターが「ママチくん」と決まった。これはモチーフとなった国指定重要文化財「土面」が昭和六十一年にママチ遺跡から出土したことに因む。

昭和二十六年の改正時、真町とされた以外のママチは泉沢となった。泉沢とはママチ＝泉池・だらけの・もの（川＝沢）の和訳からの命名である。この地域をママチ山林ともいい、ママチ川支流に泉川がある。

昭和六年六月に江別町は六三六町歩に及ぶママチ山林を町民用の薪炭備林として買収、千歳市が苫小牧東部の後背地として買収するのは四十五年九月のことである。直後に（株）千歳振興公社を設立、四十七年に「公拡法」の公布を受け泉沢開発業務を千歳市土地開発公社に引き継いだ。その公社も平成二十五年を以て解散した（泉沢向陽台については後述）。

臨空工業団地は全域四三四畝が泉沢一〇〇七番地一筆、工場ごとに枝番がつく。造成前の丸太組みの望楼と昭和五十四年の臨空命名が懐かしい。

昭和十七年の字名改正

昭和十二年、海軍基地に決定した千歳村は区画整理の必要性を考え、翌年二月に都市計画法の指定申請をなし十月に内務省から指定された。開戦翌年の十七年四月九日に千歳第一土地区画整理組合の設立認可を申請、七月二日に認可があり完成をみたのは二十四年六月十日であった。

区画整理に伴う昭和十七年五月一日の字名改正について、『市史』では「町制が施行された昭和十七年五月町制施行のとき：字名改正が一部なされたというが、当時の資料が保存されていない」、『増補』においては「町制の施行された昭和十七年五月に、町の字名改正が行われたといわれる。その直接の資料はない…」とある。『市史』にあつては本町、東雲町など

市街地一〇町の誕生に全く触れていない。

市街地一〇町名について『角川日本地名大辞典 北海道』は「昭和17年（現在の町名）」とし、昭和二十三年発行の『千歳町勢要覧』中「主要官公衙その他」には千歳郵便局・本町1丁目、医療団千歳病院・東雲町1丁目、札幌財務局千歳出張所・春日町2丁目などの町名が掲出されている。十七年五月以降の公文書における字名は、区画整理が未成で「地番・丁目新旧対照表」がなかったのか、千歳郡千歳町大字千歳村（字千歳村）○番地と旧来の住所での処理が多いなか、大字、小字を省いているが千歳町本町と新町名を用いたものも散見される。このことから一〇町名の命名は十七年であったことが推し量れる。『増補』の「昭和二十四年五月七日：次の一〇町名が誕生し…」は誤りであろう。

一〇町以外の大字千歳村ほか大字三村の小字は、区をさらに細分化したものと思われる。『市史』『増補』のとおり資料はない。

第一土地区画整理事業による町名

町名が付与された旧市街地ともいうべき一〇の町名にのみ現在「町」がつく。命名の由来は何も残されていない。

本町 「本」とは「もとからあるもの」「中心となるもの」の意で、江戸期に会所があつた千歳の中心、明治になってからは室蘭街道（札幌本道）沿いに市街が形成されていったことが命名の理由。昭和十七年の命名、十四年までに1〜4丁目、三十二年に5丁目ができた。

本町にふさわしく以前は国道36号沿いに役場、教育委員会、警察署、郵便局、消防のほか、北海道拓殖銀行、札幌信用金庫があつた。昭和三十二年九月までは字である。

東雲町 東雲とは「篠の目」＝篠竹で網代様に組まれた明り取りが転じ



写真1 雪印乳業千歳牛乳処理場
20人ほどの従業員が一日あたり1万本の瓶詰め牛乳を生産していた。当時はミルクローリーではなく集乳缶で生乳を集めていた。茅野商店隣地

なった歴史があり、市立総合病院、胆振千歳郵便局のほか、財務局や税関の千歳出張所、市給食センターがあった。

また、大正十四年から市街で集乳・バター製造を行っていた北海道製酪販売は、戦後に雪印乳業として真町から5丁目に工場を移設、牛乳を生産した。三十七年、恵庭に大規模な森永乳業の工場が操業し閉鎖となった。

朝日町 区画整理区域の東に位置し、朝日が昇る方向に当たることから命名。二十四年までに1〜7丁目、三十二年に8丁目が成立する。

ママチ川東側8丁目の成立は、朝日町一二〇六番地の水田地帯にオクラホマ州兵師団の駐留前後から米軍人・軍属がチトセ現地妻と共に生活するための個人借家（プライベート・レンタル）が数多く建てられたことによる。リトル・アメリカと称され昭和末期まで一部が残存した。

清水町 南の町境に清流として知られる千歳川がゆったりと流れる。昭

和十七年の命名、二十四年までに1〜6丁目、五十九年十月二十二日に7丁目ができた。7丁目の成立は、五十四年に完成した国鉄千歳線高架鉄道橋梁の完成による旧線路敷の編入のためであった。旧線路の東側に高架橋梁を配置した理由は、市街化が進んでいる西側を避けることと東側の地価の低廉にあった。千代田町、栄町の7丁目東進の理由も同じである。

「あけぼの」の意。区画整理区域の東側にふさわしい。昭和十七年の命名、1〜5丁目がある。戦中、現市庁舎が建つあたりは東雲町が定着せず川南第5と呼ばれていた。

周辺は下士官営外酒保、航空廠工員寮・購買部が建つ海軍用地が多かったことから戦後に官庁街と

朝鮮戦争時は特殊飲食店街の様相だった。人口割酒類提供店舗数（S62）で東京都中央区（銀座）、沖縄県コザ市（現・沖縄市）に次ぐ全国三位の千歳における中核的飲食店街。飲食店街は駅前通方向へと連担する。

幸町 昭和十七年の命名、1〜6丁目がある。この町に幸あれという願望を表しているのか。苦小牧、江別、恵庭のほか各地に同名が多い。

昭和二十六年米オクラホマ州兵部隊駐屯時、米兵相手の「パンパン」とよばれた夜の女性による性病対策のために開設された道立札幌治療院千歳診療所（後の幸病院）が4丁目にあった。幸病院の「幸」は幸町にあったからか、女性の将来の幸せを願ったものだったのか。

千代田町 昭和十七年の命名、二十四年までに1〜6丁目、五十九年十月二十二日に7丁目ができた。千代田とはふつう水田のある地域の名であり、この地も明治期から昭和初期までは田圃だった。この田に水を引くための用水路が、蘭越・旧・北海少年院前・緑小学校前・旧・開拓農協前・千歳中学校前まで東進、一つの流れはグリーンベルト西側、もう一つの流れは苦小牧信用金庫左・日本生命ビル右を流れ千歳川に注いでいた。用水路跡は、ほかの街区にはない路地として今に残る（写真2）。

町名は稲作の歴史を残しつつ、豊かさが長く続くことを願ったの命名。

栄町 昭和十七年の命名、戦時中は海軍航空廠工員宿舎があった。二十四年までに1〜6丁目、五十九年十月二十二日に7丁目ができた。この町が未永く栄えてもらいたいという願望からの命名だろう。



写真2 用水路跡の路地（平成27年9月撮影）
正面は千歳川対岸の千歳警察署（苫小牧信用金庫横から撮影）

昭和末期まで航空廠工員宿舎浴場の浴室が、観光産業協同組合のクマの木彫り作業所として使われていた。

錦町 昭和十七年の命名、1〜4丁目がある。室蘭街道に面し戦前から住宅・店舗が連なり、本町から続く市街地を形成していたことによる。国道36号と駅前通りの交差点は錦町十字街と呼ばれる。昭和十二年に千歳駅前と湖畔

を結んだ北海道鉄道バスの停留所は「千歳市街」だった。

また、錦町十字街は国道337号と道道16号支笏湖公園線の起点にもなっている。ちなみに国道36号に掲示される青地に白字の道路案内標識「千歳〇〇km」の「千歳」とは、本町・川南通との交差点になっている。

春日町 昭和十七年の命名、1〜5丁目がある。十四年十二月までに千歳海軍航空隊の将官用、佐官用、尉官用の官舎四九棟・八二戸が2〜3丁目に整然と並んだ。町が春の日を浴びた若芽のようにすくすくと伸びゆくことを願っての命名か。

緑町 昭和十七年の命名、1〜5丁目がある。緑が豊かで住みよい町ということからの命名か。簡明で口調がよく全国・全道各地に同名がある。

昭和二十四年の町字名施行

『千歳市例規類集』の市制・字名にある「昭和二十四年五月七日施行」

とは、六月十日の第一区画整理事業の完成を前に町議会でも市街地一〇町とともに千歳全域の字名を新たに議決した日であろう。

昭和二十六年の「大字名廃止並びに字名改正要領」によると「廃止する大字名」として旧村名四、「改正字名呼称」三一、「改正により廃される字名」一四、また「存置される字名」として先述の市街地一〇町と蘭越が記されている。このことから二十四年においての町字名は長都、蘭越、烏柵舞、市街地一〇町、廃止字名一四の計二七であったと思われる。

「改正により廃される字名」 アウサリ、ネシコシ、シユクバイ、ケヌフチ、ホカンカニ、コムカラ、ホロカ、ホロカ太、ホロカケヌフチ、ターツウシナイ、シーケヌフチ、マ、チ、マ、チ太、カマカ

終戦直後の字名の実状は、一四の小字だけでは郵便物の配達などに困難をきたし、前述の区名に東部など（長都西部、嶮淵中央…）のほか、第一、第二など（川北第四、根志越第一…）と細分化していた。ほかに、後に町名となる通称の氾濫（湖畔、末広、日の出丘、青葉丘、真町、真々地、祝梅、勇舞…）、入植地を長野隊、静和（静岡隊）といったほか、鉄道官舎、烏柵舞第一発電所などの目標地名が入り乱れていた。また、アイヌ語地名もカタカナ表記と漢字表記が混在していた。

昭和二十六年の命名

昭和二十六年四月三十日限りで大字名が廃止された。また、旧来の字名（小字）改正は「字名中その呼称は所謂当字的なものが殆んどであって完全にこれを呼称するものが少ない状況にある」とされた。

昭和二十六年五月一日に施行された字名について述べていく。うち、長都、釜加、都、上長都、根志越、中央、泉郷、協和、幌加、新川、東丘、駒里、真町、泉沢、蘭越、美笛については既述した。

美々駅が設置された。十二年、千歳方下り右方の切通工事中に発見されたのが縄文前期の海進を示す美々貝塚。駅は近年、都市に最も近い秘境駅として鉄道ファンに人気がある。平成二十四年にはBS日テレで『秘境駅を旅する』『美々駅』が放映された。

また、美々には新千歳空港がある。工事中の昭和五十一年に不思議な動物の形をした国指定重要文化財の動物形土製品が出土した。

平和 戦前の海軍航空基地敷とほぼ同じ区域となる。平和とは混乱の反対語である。他市における平和という名をみると、夕張では事故の多かった炭鉱を昭和十二年に再開するにあたり平和としたほか、旭川では戦前の師団通を戦後に平和通と改めた。また、樺太引揚船泰東丸ほか三船がソ連潜水艦に撃沈され、その慰霊碑がある留萌の丘を平和台という。

戦後、千歳には連合国軍米軍が進駐していた。戦前から基地が所在し、平和という字名をつけた当時は朝鮮戦争下で米空軍と陸軍が進駐していた。占領下で千歳の経済を握っていた米軍との共存共栄を求める町当局が、基地に混乱の対語である平和と名付けることには違和感がある。米軍は対ソ冷戦下に日本の平和を守る盾であるということからの命名と思われる（昭和三十年頃に作られた『千歳行進曲』にも「平和の盾は自衛隊」という歌詞がある）。戦争の対語や奴隷の平和ではなく積極的な平和の意だろう。

祝梅 シュクパイ⇨成長した・イラクサ

江戸期からある広大な区域の地名。祝梅の漢字を当てたのは天理教祝梅分教会であったといわれる。天理教の紋が梅鉢であることから、シュク（祝⇨めでたい・祝詞）バイ（梅⇨天理教）⇨祝梅とした。昭和十年発行の『三村銘鑑録』には「天理教兵神大教会夕張分教会祝梅宣教所」と大書された表札が門柱に掛かっている写真がある。開設は明治末期のことである。

区域のほとんどが戦前は水谷農場、戦時中は海軍第二（連山滑走路）・



写真4 天理教祝梅宣教所
「千歳郡千歳村字祝梅天理教会高橋半六氏宅」と説明がある昭和9年発行『三村銘鑑録』の写真

第三千歳航空基地、戦後は米軍の第二地区の一部（主⇨柏台）、第三地区を経て、現在の陸自東千歳駐屯地と北海道大演習場東千歳地区となる。

なお、イラクサとは茎の表皮から繊維⇨白い糸を得ることができる。

北信濃 終戦時に長野県から緊急開拓団が入植した。八月十六日のことで場所は南28号以南、東6線から9線までの間であった。この土地を入植者はいつのころからか故郷を偲んで北信濃と呼んだ。信濃とは東山道に属する長野県の旧国名で、長野から遠く北にあることから北信濃とする。

信濃という地名は戦争孤児を題材とした山崎豊子の小説『大地の子』で、主人公・松本勝男がいた長野県満蒙開拓団・信濃郷としても出てくる。

旧市街地北部の支笏火山灰台地の大部分が含まれ、のちに北栄町⇨北栄・新富、信濃、富士、富丘、自由ヶ丘、北斗、桜木、北光、北陽、長都駅前、あずさ、勇舞が成立する。第一工業団地の大部分がもと長都村。

藤の沢 もと烏柵舞村の一部。

山線第二発電所駅周辺の地名、駅名は後に牛の沢と改称された。牛の沢の烏柵舞林道と旧・支笏湖街道（沼街道）の交点には恵庭営林署の廠舎と山三ふじやの造材工場があった。地名の由来は「山三ふじや（富士屋）」と「牛の沢」の融合からきているのだろう。ふじやの「ふじ」は原木の納

入先である富士製紙（江別／M41～S8／現・王子エフテックス）から採ったといわれる。山三の造材工場は大正初めには存在したという。

山線の廃止によって通学の手段を失った子供のために藤の沢小中学校が開校した。また、昭和三十六年の植樹祭のとき、湖畔の王子別邸に向かわれる御料車の車列はここを通った。

水明郷 もと烏柵舞村の一部。

水明郷は王子製紙苦小牧工場に送電する千歳川水力発電所が五カ所ある地域の字名。第一発電所の水溜のほかダムがある。水明とは、ダムに湛水された澄んだ水が太陽や月で美しくはつきり見える様をいう。水明の郷が命名の由来。発電所は昭和三十年代になると自動化、遠隔操作となり電力部員は苦小牧からの通勤となった。水明小中学校は昭和四十年年度までに廃校となったが、今も体育館とグラウンド、遊具が森の中に残る。

発電所は上流から第一、第二、第五、第三、第四が一〇キロの間に並ぶ。山線鉄橋を含む発電施設は「千歳市の製紙関連遺産」として、平成十九年に経済産業省が認定の「洋紙の国内自給を目指し北海道へと展開した製紙業の歩みを物語る近代化産業遺産群」を構成する。第一発電所のもと社宅街の春の桜、暗渠送水路対岸の秋の紅葉は美しく雑誌などに紹介される。

西森 もと烏柵舞村の一部。

市街地の西にある森林地帯の意（『北海道地名誌』）。当初案では西森のほかに「東森」もあった（大字名廃止並びに字名改正要領）。

紋別 モベツ子である・川（千歳川の支流） もと烏柵舞村の一部。

当初の案では東紋別、西紋別に分かれていたが、恵庭営林署の担当区が紋別ということから東西に別けなかった（『市史』）。

幌美内 ポロピナイ大きな・枯沢 もと烏柵舞村の一部。

「水蒸気を噴き出している恵庭岳の東方の深い割れ目は、いつきに頂上

の大火口から支笏湖にかけおる。これがこの沢（『ちとせ地名散歩』）。

明治期に塩谷栄作が、大正四年からは佐々木初太郎が湖際で温泉宿を営んだ。丸駒とは明治十二年に漁に来住、旅籠を営んだ塩谷の屋号。塩谷は箱館戦争で官軍函衛隊長だった二代目戸長秦一明の部下で娘婿だった。

筆者はこれまで幌美内、奥潭、支寒内と発音する人を知らない。皆、ポロピナイ、オコタン、シシャモナイとアイヌ語由来の発音をする。

奥潭 オコタヌンペ川口に・村のある・もの もと烏柵舞村の一部。

昭和三十五年から五十七年までの間、恵庭岳山麓オコタン温泉で北炭系列の支笏湖グランドホテルが営業、同系列の支笏湖観光運輸の客船が着棧していた。四十八年には札幌冬季オリンピック滑降競技が開催された。

なお、恵庭岳を由来とする自治体名があるが、山頂部、溶岩流の堰によってできたオコタンペ湖を含んで湖側斜面は千歳管内となる。

モラップ 小さな・低い・もの（山） もと烏柵舞村の一部。

キムンモラップ（四七八メートル）とピスンモラップ（五〇六・四メートル）が並ぶ。ピスンとは浜手の意で苦小牧側にある。ピスンモラップの北斜面には以前、国有林野内国設モラップスキー場があった。一对の小山は四万二〇〇〇年前の支笏火山噴火・支笏湖出現前からあり、近くの湖際はカルデラになっている。

モラップの西方にプライベートビーチのような小さな湾がある。シリシユット（山・麓）である。昭和三十七年、米軍に接収され水上訓練場（FAC・1057）となったが、その実は米軍人家族の慰安施設「レクエリア」だった。数多くの建物でアメリカの景色となった（S44返還）。

湖畔 トウヤ湖・岸 もと烏柵舞村の一部。

千歳川呑口に架かるベツパロ（川・口）橋左岸の支笏湖岸字シリセツナイ（鳥の・巢・（のある））沢／『千歳さけ・ますふ化場創設の記録』

に山線駅名として明治四十一年に誕生、以後は周辺を湖畔と呼んだ。王子製紙はトウヤを湖畔と和訳したが、虻田では洞爺と漢字を当てた。

身近な支笏湖は、面積で国内八位、水深と貯水量では二位と巨大な湖。

美しく響きの良い地名である湖畔に昭和五十年温泉が通湯、六十一年四月二十日に観光地名の支笏湖温泉に変わってしまった。湖畔支所は支笏湖支所となったが、千歳の人は以前から湖畔地区を単に支笏湖と呼んだ。

苫小牧では支笏湖と樽前山が校歌に数多く登場する。また、王子製紙や市営の施設も多く支笏湖が千歳という意識をあまり持っていない。

(校歌例) 勇払原野 末遠く 樽前山の 姿崇し 支笏の湖の水清く…

支笏内 シサムナイⅡ和人・沢 もと烏柵舞村の一部。

地区には西からシシャモナイ沢、苔の洞門の沢、落畑の沢と三つの沢がある。苔の洞門からの樽前登山ルートをシシャモナイコースといい、お花畑を越え溶岩塊をまっすぐに登坂する。一度、登ったことがある。眼下に支笏湖を望み絶景であるが、苔の洞門の閉鎖によって現在は登れない。

第二次土地区画整理事業（末広地区）

米軍の駐留で飛躍的に発展した千歳は、さらなる都市形態の整備が必要とされ国鉄線以東の水田地帯である末広地区を昭和二十八年に施行地区として指定、全地区を末広第一と第二に別け事業を進めた。第一は昭和三十三年二月に北海道知事から認可を受け三十七年度に完成、第二は三十九年四月に認可を受け四十一年度に完了をみた。第三は現在の稲穂となる。

末広町 千歳市街を貫流する千歳川の北にある。北西に連なる支笏火山灰台地・小高い丘のふもとの水田地帯が扇子を広げた形に似ていることから末広と名付けられた（『千歳市農業協同組合史』）。末広には「だんだん栄えること」の意がある。昭和二十六年から五十九年の町名で三十二年

に根志越の一部を編入している。千歳線・千歳川・南29号・東11線に囲まれた区域となる。要は南29号と東11線の高台交点の麓か。

昭和三十五年、一部が末広町東区、末広町中区、末広町西区となった。さらに、四十二年には末広町各区の外縁に末広新町東・中・西・高台が成立した。末広新町地区は日の出大通の東側と北側にあたる。五十五年には第三末広として稲穂が成立、併せて町名の整理を行った。五十九年の鉄道高架橋梁による割譲については先述した。

末広町東区 昭和三十五年1〜4丁目ができ、四十二年に1〜3丁目になり末広新町東1〜2丁目が成立。五十五年十一月四日に末広1〜3丁目となった。

末広町中区 昭和三十五年1〜3丁目ができ、五十五年に末広4〜6丁目となった。

末広町西区 昭和三十五年1〜3丁目ができ、五十五年1丁目のみとなり末広7〜8丁目となった。五十九年、町名が消滅する。

末広新町東 昭和四十二年から五十五年の町名。1〜2丁目。2丁目には現在より少し下流に捕魚車（インディアン水車）があり、そばに西越採卵場（現・千歳川捕獲場）が明治三十年から平成五年まであった。西越は、ネシコシ（ニシコウシ）が「根志越」の漢字を当てられる以前の漢字表記であった。周辺両岸は昭和二十六年以前は根志越の一部。

飛行場進入路直下となる現在の交通安全教育施設Ⅱ交通公園の場所に末広小学校（S31開校、49富丘移転）があった。花園1〜7丁目になる。

末広新町中 昭和四十二年から五十五年の町名。1〜3丁目があった。花園3〜5丁目になる。

末広新町西 昭和四十二年から五十五年の町名。1〜4丁目があった。花園6〜7丁目、高台3〜4丁目になる。

末広新町高台 昭和四十二年から五十九年の町名。当初1〜4丁目があった。「末広新町北」とせずに末広から見ると支笏火山灰台地にあることから末広新町高台とした。五十五年を高台が成立したが、鉄道高架橋梁敷部分の1丁目のみが残り五十九年をまつて廃止された。

稲穂 末広地区の入植は明治十七年の山口県人といわれる。二十七年には稲作のため水利権を取得、蘭越に水門を設けて通水し根志越地区（末広）まで水を引いた。蘭越から取水したのはサケの湖上母川だったからで、用水路を通した市街地のルートを戦後、用水通（新川通）と呼んだ

命名由来が『S56住居表示綴』にある。

当該末広町一帯は戦前から米処として栄え、最近まで米作りをしていた。

（略）稲の穂の重く垂れ下がる稔りにたとえ、稲穂と命名する

末広第三地区土地区画整理事業完成記念碑「理想郷」に地名由来はない。昭和五十五年四月二十七日の命名で1〜4丁目があるが、当初の住居表示は1、4丁目。2、3丁目の住居表示は六十一年十一月七日。

末広 昭和五十五年十一月四日の命名（同日に末広、高台、花園が住居表示実施）。1〜8丁目がある。

もとの末広町東・中・西区からなる。末広町を冠する七つの類似町名から郵便配達困難区域といわれたこともあったが、町名を整理するにあたり新たなものではなく、末広の由来となった地形が区域の大部分を占めることから旧町名に復した。

高台 もとの末広新町高台1〜4丁目、末広新町西2、4丁目、昭和五十五年十一月四日に高台1〜6丁目になる。高台の名を冠した小学校が昭和四十五年北信濃（後・富丘）に開校しているが、末広新町高台という町名からではなく支笏火山灰台地Ⅱ高台に由来している。

花園 昭和五十五年十一月四日の命名で1〜7丁目がある。もとの末広

新町東・中・西の一部。花々を育て、潤いのある生活しやすい町を作っていくことを願ったの命名か。2丁目はインディアン水車、サケのふるさと千歳水族館、道の駅サーモンパーク千歳がある市内観光の一大拠点。

北信濃地区の開発

陸空自衛隊の来駐、千歳飛行場における民間航空の伸長、米軍撤退による雇用先確保から造成が始まった工場団地への大手企業の立地・操業によって人口は順調に伸び、市街地北部の支笏火山灰台地に住宅地が急速に拡がっていった。のちに北栄町Ⅱ北栄・新富、信濃、富士、富丘、自由ヶ丘、北斗、北光、北陽、長都駅前、あずさ、勇舞が成立する。地続きのもと上長都に桜木とみどり台北・南がある。



写真5 支笏火山灰台地（平成27年9月撮影）
国道36号・錦町からもと学田の坂を見る 改修で緩傾斜になっているが、もとの地形は緑小学校裏や北進小学校下のように垂直に近かった

支笏火山灰台地が栄町と接する付近は、昭和二〇年代中頃から希望が丘と呼ばれている。千歳高校の生徒が名付けたといわれ、千歳高校、北栄小学校の校歌、もと千歳市啓明寮（市職員独身寮）の寮歌などにうたい込まれている。

（啓明寮歌）青雲流れる 希望が丘のもと 我等一六人の若者が集う

北栄町 北信濃の共同墓地横に北栄小学校が開校し

たのは昭和二十八年五月のことで、教室に火葬の煙が入ってきて困ったという。その頃、南32号と東11線交点周辺は静和第一と通称されていた（『砂礫に耕す』）。

校名の由来は学校にも記録がないという。栄町の北に位置することからの校名であろう。昭和三十年九月、自衛隊官舎が建ち並ぶこの地に町名を付するにあたり区域内の小学校の名から北栄町と命名した。坂下の栄町との境界Ⅱ東11線は江戸期の長都街道跡である。

北栄 昭和四十四年十月六日に住居表示を実施、北栄町の一部から成立した。1〜2丁目がある。命名由来は北栄小学校があること、住居表示審議会発足当初から「町」を省く方針だったことによる（『住居表示綴』）。

住居表示は北栄、新富、信濃、富士が同時。四町成立で鉄南の北信濃は大部分が第一、第二（一部）工場団地だけとなったが、市は通産省工場適地調査の地区名である「北信濃」を存続させることとした。

新富 昭和四十四年十月六日に北栄町と北信濃の一部から成立した。新たに成立したゆたかな区域ということからの命名か。1〜3丁目がある。

『住居表示綴』には命名由来の記載はないが「五町内会から三五の案が出され、新富、有明の二案が残った」とある。

信濃 昭和四十四年十月六日成立。1〜4丁目がある。北信濃の一部から成ったが、前年開校の信濃小学校があったこと、開拓者の信州への思いから新たな町名を欲しなかったということだろうか。

信濃小学校周辺は、規模の大きな凹地でポロコツ（大きな・谷）と呼ばれていた。現在は埋め立てられているため判然としないが、北斗中学校西の北部隊内凹地から想像は容易である。谷の下が長都街道の休憩地トメム（二つの・泉池／現・防災の森・河川災害訓練広場）、トメト川（原名ツメムナイⅡ二つの・泉池・川）となる。

富士 昭和四十四年十月六日成立。1〜4丁目がある。『住居表示綴』には単に「町内会役員会で決定」と記載されている。

富士Ⅱ静岡であるが、この地には静岡隊ではなく長野隊が入植している。もと開拓農協組合員の小林秀男によると、命名は長野県南佐久郡南相木村出身で当時組合長だった中島千勝だというが、その由来についてはわからないとのことであった（三溝市史編さん委員調べ）。

長野県各地から富士山を見ることができ、南相木からは見えない。しかし、至近の小海線小海駅から「高原のポニー（C56）」で知られた高原列車で中央本線に向かうと富士山が見えてくる。小海線は一〇〇〇以上の高地を走ることである（最高地点一三七五㊦）。長野に因んだ北信濃が住居表示でなくなることから故郷の景色を偲んでの命名と思われる。

富丘 富丘の名は市が昭和四十〜四十三年度にかけて造成分譲した北信濃富丘団地が初出となっている。市営住宅も一種二階建四戸と二種平屋四六戸（現存・富丘4の10）が四十年十月に完成した（S40広報『ちとせ』）。

東11線以北初の宅地造成で市の期待するところも大きいものがあり、台地にあるゆたかな町であれとの願望が込められているのか。命名は当時の管財の職員であろう。当初は南30号までが町域であった。

昭和四十八年二月一日に住居表示を実施し富丘と命名、1〜4丁目が出来たが、当初は「富岡」がバス停ほかで混用されていた。

自由ヶ丘 昭和四十年、二五戸からなる自由ヶ丘団地内会が発足した（『自由ヶ丘町内会30年のあゆみ』）。住民が新天地のマイホームでのびのびと生活する意か。

昭和四十六年五月、測量設計事務所による住宅造成事業法認可団地の第一号として自由ヶ丘第一団地が造成に着手した（『千歳民報』S46・9・12PR版）。五十三年十一月一日、住居表示を北斗、桜木とともに実施し

町名を自由ヶ丘とする。1〜7丁目がある。

当初は「桜木」案もあった（『住居表示綴』）。

北斗 昭和五十三年十一月一日に住居表示を行い成立、当初は1〜4丁目だった。北部隊スキー場から続くポロコツを埋め立て五十八年六月二十日に5丁目（北斗中ⅡS 59開校）、八月三十日に6丁目延伸した。

北斗七星は燦然と輝き、北の方角の目印となる北極星を探す指極星として知られる。平成十八年に上磯町と大野町が合併して誕生し、来春の北海道新幹線新函館北斗（現・渡島大野）開業に沸く北斗市のホームページには「北斗とは小さな星がかたまりあつて一つの核をなすともいわれており」とある。さすれば、住民が一致団結するという意味があるのか。住民が一体となって町づくりの目標に向かって進むことを願つての命名か。鉄道ファンには上野発常磐線経由青森行の夜行寝台普通急行「北斗」が

思い出される。後に愛称は、道内特別急行に襲用される。

桜木 もと上長都であるが、北信濃と地続きであり宅地造成と住居表示が自由ヶ丘と一緒にあつたことからここで解説する。

昭和四十六年五月、民間資本による住宅造成事業法認可団地の自由ヶ丘第二団地として造成分譲された地区にあたる（『千歳民報』S 46・9・12 PR版）。

昭和五十三年十一月一日に住居表示を行い1〜5丁目成立した。勇舞、若葉という案もあった。航空機激甚騒音青葉地区の集団移転先地である。

桜木、自由ヶ丘という町名が成立する半年ほど前の昭和五十三年四月一日、北信濃に桜木小学校が新設された。校名の由来は次のとおり。

昔、エゾヤマザクラが風雪に耐え美しく咲いていた。再び美しくたくましく桜に囲まれた学校をつくり…との願いをもつて、校名をつけた（桜木小資料）。

桜木小学校敷は住居表示審議中に自由ヶ丘7丁目となるが、町名を考へ

るにあつて桜木小学校が地域のランドマークであり、町内会として最も希望が多いことなどから桜木とした。また、自由ヶ丘町内会が桜木を採用した場合は、「若葉」を用意していた（『住居表示綴』）。

北光 昭和四十六年五月、民間資本による住宅造成事業法認可団地の第三号のひばりヶ丘住宅団地が造成に着手したのが始まりで、ひばりが天高く舞うことからの命名（現・3〜4丁目／『千歳民報』S 46・9・12 PR版）。もと農地を彷彿とさせるものがある。

昭和四十年代末にひばりヶ丘隣接地に静和団地が造成された（現・1丁目）。静和とは静かで和やかな町にしようとの思いが込められた。

昭和六十二年十二月七日に住居表示を行い北光となる。1〜7丁目成立した。千歳の北に光り輝く町との意味が込められた（『北海道新聞』S 62・12・8）。審議会では二団地町内会が自らの団地名を町名に推したが、ともに町名の案として北光があつたことからまとめた（『住居表示綴』）。

長都駅前 長都駅前東6線北側の住宅地開発は早くから行われていた。昭和四十七年には長都産労者住宅団地、五十年に長都駅前団地、五十一年にパークタウンおさつ、五十二年にグリーンタウンおさつ、五十九年にサニータウンが造成分譲されていた（開発時Ⅱ上長都／現・3〜4丁目）。

昭和六十三年、おさつ駅前地区土地区画整理事業が認可され、おさつニータウンの造成分譲が開始された。平成四年、住居表示審議会は東6線北側の先行開発とおさつ駅前地区を合わせると区域の規模が大きことから東7線・勇舞川で二町に分け、十月二十四日に住居表示を実施した。東7線以北を長都駅前1〜4丁目、以南を北陽とした。

住居表示審議会の答申書に命名の由来がある（『住居表示綴』）。

長都という名称は歴史的に、明治の初めから長都村と言う名称で事実上現れて来ている。／昭和17年の字名改正、昭和26年の大字の廃止等を経て、な

お、現在まで長都の名は町名としてその名を歴史に止め、J R長都駅 長都駅前郵便局として地名、建物、建造物等にもその名が冠され、地域住民に親しまれ定着して来ている。／此の度の町名変更の区域がまさに長都駅前であることから、長都駅前と命名する。

全国的にも珍しいバスの停留所のような町名は、何とか「長都」を盛り込みたい開拓者の執着が強く働いた。審議会は答申書に言い訳を付記した。

長都、上長都の類似町名で苦慮したが東・西・南・北などとは意味合いが違い特異な例である。今後は極力、類似町名を避けることが制度の趣旨である。

平成二十五年、おさつ駅みどり台地区の住居表示によって一部を編入、5丁目が成立している。

町名の種となった長都駅の開業は、昭和三十三年七月一日千歳町の市制施行の日だった。開業の四カ月前に仮乗降場として供用を開始、単線で上り左方の単式ホームはキハ三両分と短く、駅舎などの待合はなかった。現・長都駅前、北陽の防風林付近には昭和二十年十月に静岡隊が緊急入植した。

北陽 昭和四十八年四月十日、北海道千歳北陽高等学校が開校した。当初は中央の木造仮校舎で授業、北信濃の農地に校舎を新築し移ってきたのは五十年の年の瀬二十七日のことだった。校名由来は次のとおり。

千歳市の北に位置し、太陽のように力強く光り輝き、明るくたくましく永遠に伸びゆく学校を象徴した(学校ホームページ)。

平成四年十月二十四日に住居表示を実施、地区のランドマーク千歳北陽高校と明るい希望に満ちた町の未来に願いを込め北陽と命名された(『千歳民報』H4・5・1)。当初は1〜4丁目、二十七年五月十六日に北陽高校前地区土地区画整理事業によって5〜8丁目が成立した。

あずさ 平成八年二月十七日に住居表示を行った北信濃第二地区土地区画整理事業で、北信濃、信濃とともに長野県由来の町名あずさ1〜3丁目

が成立した。あずさは松本市の近くを流れる信濃川水系犀川さしかがわの上流部別称である梓川あずさに因む。梓が当用漢字にないためひらがなとした。

昭和四十一年から運行していた八時ちよほどの新宿発松本行特急をうたい込んだ狩人の『あずさ2号』が五十二年に大ヒットした。翌年、同下り列車はあずさ3号と改称された。特急の愛称を彷彿とさせる町名である。

あずさ5丁目は平成十三年一月二十三日に1〜9番、二十四年九月十五日に10〜25番が住居表示をもって成立した。あずさには4丁目が無い。隣接の農用地が将来宅地造成されることを見込んでの処置なのだろうか。

なお、富丘中学校は富丘ではなく北信濃、現・あずさ1丁目に建てられた。

勇舞 イヨマイIIかくし所

勇舞地区土地区画整理事業によって造成分譲された。施工認可は平成十年九月、住居表示は十七年十月八日で勇舞と命名された。住民アンケートの結果、土地区画整理組合の名、地域を流れる川の名から勇舞とされた。さらに、英語のユー・マイという発音にも通じリズム感もよいとされ、ひらがなの「ゆうまい」案も多かった(市建設部「住居表示便り」)。1〜8丁目があがる。

イヨマイについて、長見義三は『ちとせ地名散歩』に「古老の話によると、沢の途中の沼の形が陰部に似ているのでそう呼ばれたと伝えられている」と記し、『増補』においても同様に解説した。アイヌの人々は川を女性に擬人化していた。

みどり台北・みどり台南 もと長都、上長都であるが、長都駅前に隣接し支笏火山灰台地にあることからここで解説する。

おさつ駅みどり台地区として土地区画整理事業が実施された。平成十二年八月に施行認可、十三年八月に着工し翌年三月から分譲が開始された。

町名を付するにあたり、長都駅前に隣接していたゴセン川以南を割譲し

5丁目とし、ゴセン川以北を長都川で北と南に二分した。みどり台の名は土地区画整理組合の名から採った。アンケートでは、「みどり台」希望が四分の三と多数を占めた（「住居表示便り」）。命名と住居表示は平成二十五年二月九日、北は1〜5丁目、南は1〜4丁目が成立。地域の地形はゴセン川、長都川の浸食による起伏があるが「台」にはなっていない。北2丁目からはJRサッポロビール庭園駅が隣眉である。

祝梅、根志越地区の開発

祝梅、根志越はもと大字千歳村の一部である。市街地の拡大に伴い祝梅地区、根志越地区はともに昭和四十年代から市街地開発事業が始まっている。開発の年代順に解説していきたい。

東郊、住吉 もと根志越、日の出丘、青葉の一部

東郊地区土地区画整理組合が昭和四十二年度から五十年度にかけ施行した。当時、街路日の出大通以東は市街地東部のはずれに郊外であったことから東郊地区と組合名を付けたと思われる。町名は市街地側から住吉、東郊として昭和四十六年十一月十八日に命名された。住吉の高台も古砂丘である。また、航空機進入路の直下にあたるため準工業地域となっているほか、青葉中学校（S32開校、48根志越（現・豊里）移転）跡地はサケのふるさと千歳水族館の対岸・住吉グラウンドとして利用されている。

東郊は組合名に市街地東のはずれから、住吉は住んで良かった住みやすい町をつくつていこうが由来か。東郊は1〜2丁目、住吉は1〜5丁目成立、五十九年十一月二十六日に住居表示を実施した。

梅ヶ丘、弥生、寿 もと祝梅の一部

この地は、昭和二十三年に満洲、樺太の引揚者が入植し開拓実験農場を創設したが目的の達成にいたることはなかった。朝鮮戦争のころは米軍千

歳第二地区に駐留した米兵相手の特殊飲食店街的な夜の街だった。宅地化は三十九年頃から始まった。その後、祝梅地区土地区画整理事業として市が師団通の北側において昭和四十九年度から五十六年度に施工した。

町名は昭和五十六年十月十日に命名され、梅ヶ丘1〜3丁目、弥生1〜3丁目、寿1〜3丁目成立、同日付で住居表示も実施となった。

梅ヶ丘、弥生、寿はともに住み慣れた祝梅に対する愛着から、祝梅を意識しての命名と思われる。梅ヶ丘は地形と祝梅の「梅」から、弥生は陰暦三月の異称であり梅の花が開くことを祝う早春のさわやかさと町の若々しさを表している。また、寿は「祝」と同義でめでたいことを表すとともに住む人が長命であることを願つての命名か。三つの町名で「弥生に丘で梅を言祝ぐ（寿ぐ）」とめでたい。なお、梅ヶ丘公園内「この地をば…」碑背面の説明に地名由来はない。

現・弥生に市営住宅祝梅団地が昭和五十年に、五十三年には現・寿に祝梅道管住宅団地が建設されている。人口の増加に伴い、五十一年には現・梅ヶ丘に祝梅小学校が開校した。また、宅地開発以前は、祝梅西瓜の産地として全道に祝梅の名を轟かせた。三町内には祝梅大通と祝梅北通が走る。

豊里 もと根志越の一部

豊里命名の由来は、5丁目の豊里くるみ公園にある根志越地区土地区画整理事業完成記念碑「豊栄郷」に詳しい。もとネシコシから公園の名に「くるみ」とは至つて好ましい。

碑文には次のようにある。

：明治27年ママチ川に水源を求め開田を奨励し黄金波打つ豊かな里になつてここに一世紀を迎える。：昭和46年に市街化区域の予定地区：昭和53年6月に市街化区域に編入：土地区画整理事業と住居表示を実施し、新たにこの地を豊里と命名し昭和59年10月に完成したものである。

豊里命名と住居表示は昭和五十八年十月十八日、1〜5丁目がある。

旭ヶ丘 もと祝梅の一部

旭ヶ丘は古砂丘にある。昭和六十一年十月十三日に1〜4丁目が成立、住居表示も実施した。もと祝梅であったことを示すように祝梅1〜3号公園がある。

『住居表示綴』には、多くの町内会が祝梅に対する強い愛着から「南祝梅」を希望したが、将来的に東西南北となって混乱を招きかねないと第二希望の旭ヶ丘に決まったとある。命名の由来については記載がない。

町名の由来は日の出丘、日の出に隣接していることから、日の出⇨朝日⇨旭と古砂丘の組み合わせか。市道日の出丘団地線が町内を縦貫する。

流通 もと祝梅、日の出、青葉丘の一部

千歳市工業団地はこれまで製造業を主体として企業誘致を進めてきたが、新千歳空港周辺地域における運輸・保管・流通加工の受け皿として流通業務団地を計画、事業主体は市土地開発公社とした。平成六年九月に造成に着手、七年八月に1丁目地区が完成した。1丁目完成に先立つ六月二十日に団地名から町名を流通と命名、1〜3丁目が成立した。なお、流通業務団地は一部が旭ヶ丘にも食い込んでいる。

1丁目と2丁目・日の出丘の境界は、もと海軍第二基地専用線（戦後⇨米軍）であり、並行して道道早来千歳線が走った。昭和三〇年代、米軍専用線を石勝線に転用し柏通門付近に水谷駅を設ける計画があった。

流通がもと祝梅の一部ということから、3丁目には市消防署祝梅出張所がある。

幸福・清流 もと根志越の一部

根志越橋北に昭和三十八年に千歳くるみ幼稚園ができ、翌年に千歳第二小学校（T9創立）が対岸から移転してきた。この頃から一部が宅地化さ

れた。茶谷団地（関団地／現・幸福1丁目）、根志越第二団地（現・清流3丁目）である。これらの利便施設として関商店があった。

この地で昭和十二年に陸軍特別大演習が行われたことを知る人も少なくなつた。「野外統監部御跡」碑は、陸自東千歳史料館横に移設されている。

平成三年から十一年にかけ根志越第二地区、八年から十三年にかけ根志越第三地区において土地区画整理事業が行われた。施行者は第二が市、第三が組合で、地区の東側四分の一ほどが第三地区、残り市街地側が第二地区となる。第三地区は十一年一月十三日に幸福と命名し2〜4丁目に住居表示を行った（1丁目⇨宅地造成・住居表示未実施）。第二地区は同年十一月十三日に住居表示を実施して清流1〜8丁目と命名された。

町名は住民アンケートを基に住居表示審議会において決められるのが常であるが、幸福・清流は町内会が独自に決めたという。

第二地区の清流地区は清い流れの千歳川に面していることからの命名。1丁目に千歳川の水質を維持する水道局の施設がある。なお、清流6丁目は平成十年から十一年にかけての静和地区土地区画整理事業（個人）によつた。この地には昭和二十年十月に静岡隊が緊急入植している。静和とは静岡衆が協力するの意。

幸福という地名は、道内においては旧・広尾線（S4〜62）幸福駅周辺の幸福町のみだった。「愛国から幸福ゆき」切符のブームに沸いた昭和四十八年放送のNHK総合テレビ『新日本紀行』「帯広・幸福駅への旅」では「農民が飢えと寒さにやけどつぱちで命名した」とナレーション（H27再放送）。翻つて、千歳の幸福命名の経緯は住む人の仕合わせか。

幸福町名由来⇨旧名サツナイ⇨幸福（難読）⇨幸福+福井県人⇨幸福

幸福駅⇨S4広尾線部分開業（帯広・中札内）時駅名⇨S19大正駅

愛国駅⇨S4開業 幸福駅⇨S31開業

泉沢向陽台の開発

昭和五十三年六月に泉沢の一部が市街化区域に編入され、八月には住宅地が泉沢向陽台と命名された。十月に住宅地の造成に着手、分譲地の予約が開始されている。五十四年二月二十日に若草1〜5丁目、白樺1〜6丁目、里美1〜5丁目と命名され、十一月には開村式が行われた。

昭和五十九年八月に二期住宅地が市街化区域に編入され、六十一年十月には着工式を挙行した。二期の宅地分譲開始は六十三年五月のことだった。この間、六十二年三月二十一日には文京1〜3丁目、柏陽1〜5丁目、福住1〜4丁目と命名されている。

平成二年には文京1丁目が民間開発事業者に分譲されドミニオタワー、マンション・ウィング群が建てられ、文京2丁目は試験研究施設団地サイエンスパークとして昭和六十一年から分譲が開始された。また、文京3丁目は高等教育機関誘致の目的が消え失せ、平成七年四月一日に3〜6丁目（文京ニュータウン）に分割のうえ宅地造成され分譲された。なお、昭和五十四年から造成分譲された臨空工業団地の地名は泉沢のままである。



写真6 向陽台・臨空方向とPRを兼ねた大型看板（昭和59年撮影）市道真町泉沢大通と高速道に向かう道道千歳インター線の分岐点に建てられた

千歳市土地開発公社の『泉沢・森の中の新しい都市』に泉沢向陽台と六つの町名の由来がある。泉沢向陽台の町名は公社による命名で住居表示は行われていない。

泉沢向陽台 かつて先人達が荒野を拓いて築いたこの街の黎明期を思い、また百年を迎えるに到った千歳市の新しい時代への黎明のときを併せ考えて、明るく伸びゆく街であれ！ 太陽に向かってたくましく花開き続ける向日葵の如くあれ！との希望を託した名前、それが『泉沢向陽台』となったものです。

／佐藤文紀氏（千歳市在住）

若草 雑草のように強くたくましい街、緑豊かな町として、住む人も町の名にふさわしくこころ豊かで健康で、のびのび住める町であるよう「若草」と命名されました。

白樺 北の厳しい気候風土に打勝つ強い生命力と白く美しい木肌をもつ「白樺」。しかも、泉沢周辺には最も数多く自生することからこの町の名として命名されました（執筆者註 当初、銀世界が雄大で北海道のイメージに合致することから「白雪」とされたが、酒を想起させることから再考となった）。

里美 私たちの住む里がいつまでも美しく自然と調和した町として永遠に栄え発展するように願って「里美」と命名されました。

文京 当初の土地利用計画においては文教施設の誘致と試験・研究機関の集積を核とした開発区域であったことから「文京」と命名されました。

柏陽 泉沢周辺には柏の木が広く見られることと自然と太陽の持つ暖かさともめるさが調和する街ということで「柏陽」と命名されました。

福住 泉沢周辺は、かつて多くの動物が棲んでいました。この台地は動物たちにとって豊かなところ幸福（しあわせ）の住まうところだったのでしよう。

「福住」はそれにちなんで命名されました。

蘭越地区の開発

蘭越地区は古くからのアイヌの人々の生活の場であった。千歳川は交通の手段であり、食料調達の間でもあった。また、支笏火山灰台地の千歳川

『新千歳市史 通史編上巻』を手にすると

— 市史は多様な史実を書きとめた歴史辞典 —

田 村 俊 之

千歳市総務部主幹付市史編さん担当

市史編さん事業 はじめにかえて

編さん事業は、途切れることのない時間の流れの中で、現れては消えた様々な千歳の姿を史実として市史に書きとめ後世に伝えていくことが使命である。また、新たな情報や資料をもとに、これまでの市史を訂正することも編さん事業の大切な役目である。

その最新の成果は、平成二十二年三月に刊行した『新千歳市史 通史編上巻』（以下『新市史(上)』）である。地質時代から太平洋戦争終戦時に至る間の色々な事柄を網羅した結果、およそ一〇〇〇ページの市史になった。

さて、市史を編さんするときには悩ましくも大きな課題がある。それは、個々の事柄が持っている歴史をどのような枠組みに基づいてまとめたいか、ということである。やみくもに出来事を羅列していくわけにはいかない。秩序を持った編さんこそが、読みやすい市史を生み出す有効な手段であり、方法である。

歴史を綴るには大きく二通りの方法がある。一つは時間軸を基本に行う方法で、〇〇時代というように時代を基準に区分し、その時代ごとにそれぞれの事柄を説明する。時代ごとの認識を深めるには大変有効である。しかし、一つの事柄の歴史は各時代に分散することになる。通史的に見たいときは各時代から同じ事柄を拾い上げなければならない煩雑さがある。

もう一つは、事柄（たとえば「空港」など）ごとに歴史を積み上げていく方法である。時代別に分散せず事柄ごとに時間に沿って通観できる便利さがある。しかし、いろいろな事柄で構成された一時代の全体像を見ようとするときには、時代を同じくする事柄を集めなければならない。両者を良し悪しで判断することは難しい。どちらを採るかは、編さん方針や取り上げる事柄の内容による判断が必要である。

『新市史(上)』では、第一編「自然と風土」が地勢・気候・生物などの大きな事柄の中でそれぞれの歴史が完結する後者の方法を取り、第二編から第四編は、時代別に区分する前者の方法をとっている。

ここまでは作り手側から見た市史編さん事業であるが、読み手側から見た市史はどうであろうか。読みやすい、読みづらい、扱いづらいなどのいろいろな意見があると思う。実際に手に取ってみると、分厚くずっしりと重い。重さで本の価値を判断できないが、市史の重さは千歳の出来事を網羅した歴史の重さといえる。とは言うものの、一〇〇〇ページの厚さの本を最初から最後まで読むためには相当の時間と労力、そして覚悟が必要である。だが、果たして市史に覚悟が必要なのか。私の答えは「否」である。市史は推理小説ではない。最後まで読み切る必要は全くないと考えている。

こう考えてはどうか。市史は千歳の歴史情報を最もそなえた歴史辞典である。多岐にわたる項目をそれぞれの専門家が優れた知見でしっかりと記している辞典である。興味を持った項目を開けば、色々な場面を切り取った奥の深い新たな千歳の歴史に出会うことができるかもしれない。

そこで、これから何度も新市史を手に取るきっかけとなることを期待して、『新市史(上)』の第一編を中心に内容のいくつかを紹介したいと思う。もちろん、そこを讀めと強要するつもりは毛頭ない。人それぞれに違った観点を持つことは当然であり、自分の観点を持つことは大切なことである。

どんなことが書かれているかを知るには

今さらと思われるかもしれないが、どんなことが書かれているかを知りたいときは、先ず目次をみるのが手っ取り早い。目次は本の具体的な内容をたどれる道標であり、辞典の見出しの役割を果たしてくれる。『新市史(上)』ではかなり具体的な表現の項目を目次に掲げている。

『新市史(上)』の目次は二二からなり、構成は、第一編「自然と風土」、第二編「先史時代から有史時代へ」、第三編「古代・中世・近世」、第四編「開拓の開始と近代社会の成立」の四編に区分している。この種の本づくりとしては、基本に沿った一般的な目次の構成方法をとっている。編の下には章・節・項・細項目(項を構成する個別の説明項目)がある。難しい表現は少なく具体的にであるが、ページ表記が節ごとであるため引きづらく感じるかもしれない。『新市史(上)』の項・細項目数はおよそ七六〇になるが、ここをしつかり確認すると市史に綴られた事柄を具体的に知ることができる。特定の事柄を調べ際には特に頼りになる存在になる。

なお、細項目にない事柄も本文の記述の中に含まれている場合がある。『新市史(上)』の巻末には索引を設けており、語句から記載ページを見つけることができる。すべての語句を網羅しているわけではないが、重要と考える人名・固有名詞を主に採録している。目次で見つからない事柄は、関連する語句を頼りに索引から探す出すことができるかもしれない。

どこから読み始めようかと迷う時は

私のお勧めは、第一編「自然と風土」の第六章「地名解」である。地名は地形と同様に土地に刻まれた歴史である。地形の多くは自然の営みの中で生まれてきたものだが、地名は人が名づけたものである。古くから伝わる地名は、なんとなく付けられたものはない。人々の生活や信仰と深く結びついたものであ

り、地形的な特徴を巧みに表現するものであった。人と土地の歴史を知らしめるもつとも身近な存在は地名である。そんな千歳の地名の由来を解いているのが第六章である。

第一節では千歳の旧名である「シコツ」の意味と変遷を絵図や文献を精査し、「千歳」に改名した経緯を明らかにしている。改名についての顛末は、釜加神社の弁財天御厨子の裏面に記されている。市史には原文と共に現代訳も併記してわかりやすく、実は改名したのは川(現千歳川)の名だったことも理解できる。さらに、弁財天の造営や、旅日記を通して道路事情など、当時の千歳の状況を紹介している。なお、御厨子は地名の由来を記した当時の貴重な歴史的資料として市の重要文化財に指定されている。

第三項からは「シコツ」という地名が実際の千歳の地形の中で、どの地域を指していたか推理している。これまで様々な説があつたが、説得力のある推論を提示している。

第二節から第六節までは、市内の地名について千歳川水系を中心に流域をめぐり地名の由来を解いている。その数は一五五カ所にのぼり、元になったアイヌ語とその意味を示しながら、これまでの研究者の見解を紹介している。

地名の多くはアイヌの人々が発した言葉や和人が聞き、カタカナ表記で書きとめたものである。聞き手によって異なった音に聞こえることも多々あったと思われる。また、アイヌ地名そのものも長い時間の経過の中で短縮や音の変化が生じてくる。この辺に今日の地名の解釈に違いが生じる要因がある。それもまた地名解の醍醐味でもある。

なお、現在の千歳市の町名については、守屋憲治が鋭意取り組んだ本誌の「現代千歳の町名散歩」を是非読んでいただきたい。現在の町名が今に至った変遷、名づけた人々の様々な思いと理由を明らかにした。

千歳の自然をもっと知りたい時は

千歳は人口九万五〇〇〇人を超える都市でありながら、森林、河川、火山、湖などの多様な自然に恵まれている。この豊かな自然の歴史は、第一編「自然と風土」にまとめられている。千歳の自然の概略を知りたい時は、第一章「千歳の地勢」がよい。地形や地質、動植物などが簡潔にまとめられている。

さらに深く知りたい場合は第二章以降を読んでもらいたい。注目は第二章と第四章である。第二章「千歳の気象」は国土交通省気象庁新千歳空港測候所の現役職員（当時）によるもので、明治二十六年の千歳の気温観測記録をはじめ気象観測の沿革や、観測地点の変遷を紹介している。また、詳細な観測データを駆使した図表により千歳やその周辺の気象現象を解説し、これまでの市史にくらべ格段に豊かな内容になっている。章末には気象災害史と題する江戸時代の寛文七（一六六七）年から平成二十（二〇〇八）年にわたる年表を付しており、千歳が火山噴火や大雨、雪害などを被ってきた状況がつぶさにわかる。

第四章は「生物の分布」である。実は生物については新市史以前の『市史』（昭和四十四年刊）と『増補』（昭和五十八年刊）では全く触れられていない分野である。新規に取り組んだ分野であり、生物に関心がある方には是非、目を通していただきたい。

その内容は、市内で確認した動植物のデータをもとに、水河期から今日に至る植生の変遷をはじめ、生息する哺乳類、鳥類、両生類、爬虫類、魚類などを解説している。特に市内で確認した二・四種に及ぶ鳥類の観察年・月、場所、生感区分を示した一覧表が圧巻である。また、モラップの湧水でしか生息が確認されていない世界で唯一のトビケラ（水生昆虫）を紹介している。

このほか、第三章「千歳の生い立ち」は、北海道全体の造山活動・地殻変動が千歳域に及んだ影響を、地質や千歳鉱山などの関連性を示しながら解説している。さらに千歳の特徴ともいべき火山灰台地を形成する火山灰について

も、噴出源や噴出年代や古砂丘の状況、当時の植生などの復元を試みている。今、眼前に存在する穏やかな山並みや千歳川などの風景に潜むダイナミックな自然史を知ることができる。

また、第五章「自然環境とその変遷」では千歳が位置している石狩低地帯が生物の重要な分布境界域であり、「北方由来の生物と南方由来の生物の接点として生物地理の面からみて大変興味深い地域」であるという。さらに最近の外来生物の影響なども、興味深く身近な問題として読むことができる。

第二編以降はどんな内容か

第二編からは、いよいよ人の歴史である。第二編「先史から有史時代へ」・第三編「古代・中世・近世」・第四編「開拓の開始と近代社会の成立」の三編から成り、分量は市史全体のおよそ八割を占める。

第二編は千歳に人が暮らし始めた旧石器時代と、その後の縄文時代から江戸時代中頃に至るまでの生活文化を解説している。千歳市域では昭和五〇年代前半から新千歳空港や高速自動車国道などの高規格道路の建設による大型工事が相次いだ。それに伴って大規模な埋蔵文化財の発掘調査が長期間にわたって実施されてきた。その結果、旧石器時代から近世に至る様々な遺跡の調査により、膨大な資料と情報を得ることができ、当時の文化や社会、環境などの解明が大きく進展した。その成果が『新市史（上）』に盛り込まれている。

第三編は、奈良平安時代の古代、室町鎌倉時代の中世、織豊時代から江戸幕府終焉までの近世を扱う。第二編が考古学的調査の成果に依るものであるのに対し、本編は主に文字によって残された記録（文献）に基づいたものである。古代から中世にかけての北海道を舞台にしたアイヌ民族と和人の動向、本州との関係や周辺諸国との関わりなどを詳しく解説し、その中の千歳の状況を示している。近世になると北海道は函館を中心とする道南部が和人の支配下にな

り、交易を中心とする経済活動が益々活発になる。千歳（シコツ）は幕末期まで内陸部の重要な交通・交易の要衝として様々な文献に度々登場する。第三編には千歳が当時の社会の中でどのような状況化にあったか、どんな役割を果たしていたのかを詳しく解説している。

第四編は、明治維新から太平洋戦争終戦時までを記した。この編は明治維新などの歴史的な転換点を画期とする時代区分により七つの章を編成している。各時代の行政史・産業史・交通史・社会史・文化史・教育史など、色々な分野の歴史をたどることができる。

たとえば、第四章第五節第三項は「着陸場」である。今日の新千歳空港につながり、千歳のアイデンティティの一つでもある着陸場建設の顛末が詳細に描かれている。建設に参加した人々の証言、最初の飛行機の着陸位置や機種の特定、さらには操縦士の生涯にも触れており、当時の情景が鮮明に浮かび上がる。

アイヌ民族の歴史について

ここまであまり触れてこなかったが、千歳の地にもっとも長く居住してきたアイヌ民族の歴史は是非知っていただきたい市史である。アイヌ民族は北海道を中心に生活し、縄文時代の文化や人の系譜を引き継いできた人々である。その長い歴史は、市史においても第二編以降の各編にわたって登場する。第二編第五章は「アイヌ文化期」である。アイヌ文化の成立は一般的に一二世紀後半～一三世紀といわれているが、今日、古いアイヌ文化の記録は幕末期のものがほとんどである。成り期から近世初頭までは空白の時代と表現されることもある。しかし、市内の大規模工事に伴う低湿遺跡の発掘調査によって江戸時代初期の木製の道具類などが低湿遺跡から次々と出土した。これらを江戸時代末期の記録や近代に作られた道具類と比較した結果、伝統的なアイヌ文化が今日まで継承されていることを確認できたのである。このほか、第三編では古代・中

世・近世という北海道史の中でのアイヌ民族と和人の関係、第四編では開拓と同化政策に翻弄されたアイヌ民族と千歳の状況を解説している。アイヌ民族の系譜は、第二編第四章の「先史文化人の形質」と第二編第五章第七節の「骨から見たアイヌ」に詳しく、「アイヌは日本列島の縄文人や北海道の続縄文人を母体にして成立した集団」であることを述べている。

『新千歳市史 通史編下巻』の編さんに向けて

さて、本年五月より『新市史（下）』の編さん事業が本格的に始まった。事業については本誌の『新千歳市史 通史編下巻』の刊行について」に詳しく説明がある。また、本市ホームページにも執筆予定の目次も含めて公開しているが、その一端を紹介したい。

下巻は太平洋戦争の終戦後から現代までの時代をたどることになる。現在もその時代を過ごした多くの方々が残命であり、極めて身近な過去が対象になる。いわば現代史であり、第五編の「戦後の行政」から始まり第六編「部門史」、第七編「資料」で構成する。

下巻の大きな特徴は部門史を設けることである。部門史は、事柄（たとえば「空港」など）ごとに歴史を積み上げていく方法を用いる。部門別に区分した一六の章とその下に七六の節を設ける予定である。

おわりに

時に「良いか悪いかは歴史が判断する」という言葉を耳にすることがある。しかし、歴史は良し悪しを判断しない。歴史に良し悪しの区分はなく、ともに歴史の一部であり、史実にしか過ぎない。その一方でこうも言える。悪しき出来事ほど歴史の教訓となり未来への指針となる。いずれにしても、今日の千歳を成した歴史の事実をたどるのが市史である。

『新千歳市史』機関誌『志古津』 目次総覧 (本号を除く)

創刊号 (平成十七年三月)

- 新しい市史の編さんに着手……………総務部主幹 (市史編さん担当)
 地域の歴史を考える……………田端 宏
 五六台風と千歳川放水路……………大谷 敏三
 2号 (平成十八年一月)
 ハスカップ栽培への挑戦……………佐々木 昭
 千歳の道路舗装について……………小田 賢一
 千歳市所在の戦争遺産(掩体壕)調査…大谷敏三/守屋憲治/小田賢一

3号 (平成十八年三月)

- 占領と朝鮮戦争に翻弄された地方都市……………大谷 敏三
 千歳の歴史的建築物調査……………小田賢一/北海道建築士千歳支部
 4号 (平成十八年七月)
 千歳線八十年の歩みを振り返る……………守屋 憲治
 消えた街道……………小田 賢一

5号 (平成十九年三月)

- 千歳市における経済発展のパラダイム……………島 一浩
 千歳の軍需工場・第四十一海軍航空廠……………小田 賢一
 美笛・千歳鉱山専用軌道の一考察……………守屋 憲治

6号 (平成十九年七月)

- 北の大地、千歳市に住んで……………伊藤久美子
 さらば収入役よ……………東川 孝
 湖畔の赤い三角屋根……………中村 康文
 明治・大正の千歳を支えた薪炭業……………大谷 敏三

7号 (平成十九年十一月)

- 『新千歳市史』編さん進捗状況……………総務部主幹 (市史編さん担当)
 千歳に住んでみて……………石田 宏司
 千歳神社とその歴史……………金沢 恵理
 千歳村と兵事……………及川 琢英
 献納機・海軍報国号飛行機「千歳号」……………守屋 憲治
 志古津から千歳……………大谷 敏三

8号 (平成二十年十一月)

- 支笏湖を眺めながら……………瀬戸 静恵
 J8サミット2008千歳支笏湖を振り返って……………徳永 隆
 郵便のはじまり……………中村 康文
 千歳村と兵事(二)……………及川 琢英
 初代戸長石山専蔵と石山家の人々……………大谷 敏三

9号 (平成二十一年三月)

- 千歳第四発電所での暮らし……………林 嘉男
 千歳の大規模遺跡調査と世界遺産登録……………畑 宏明
 青葉公園は市民の宝……………今野 善行
 こんな場所に六三〇〇年前の集落があった……………西田 茂
 秦一明と二〇年……………東川 孝
 シコツと千歳の地名解……………西田 秀子

10号 (平成二十一年十一月)

- エッセイ 長都の想い出……………神出 杉雄
 世界一周機「ニッポン」千歳出発……………守屋 憲治
 明治期千歳の学校教育の実情……………西田 秀子
 米軍文書に見る空襲目標としての千歳……………及川 琢英

- 11号 (平成二十二年三月) 日航マラソンの歴史……………関井 栄二
 地域内村落小史……………佐々木 昭
- 12号 (平成二十二年九月) 市民版まちめぐりガイドバス事業の取り組み……………三上 禮子
 千歳川における真珠養殖事業……………吉野 克
 米空軍千歳基地……………守屋 憲治
- 13号 (平成二十三年三月) 終戦前後の千歳……………榊原 武雄
 民間航空・千歳空港開設……………守屋 憲治
 ちとせ路線バス事始……………小田 賢一
- 14号 (平成二十三年九月) 『ちとせ歴史ものがたり』「バランス」秘話……………渡辺 敏子
 シラツチセに残されたアイヌ文化……………田村 俊之
 千歳音頭と支笏湖……………守屋 憲治
- 15号 (平成二十四年三月) 支寒内……………先田 次雄
 『石に刻まれた千歳の歴史』から……………手塚 賢
 石勝線を形成する工事線・追分線史……………守屋 憲治
- 16号 (平成二十四年九月) サーマンパークと千歳サケのふるさと館……………菊池 基弘
 深刻な基地問題に直面した千歳の対応(一)……………星野 一博
 自治体警察・千歳町警察署……………守屋 憲治
- 17号 (平成二十五年三月) 千歳手話の会誕生エピソード……………中村 秀子
- 18号 (平成二十五年八月) 深刻な基地問題に直面した千歳の対応(二)……………星野 一博
 千歳線長都駅史……………守屋 憲治
 芥川賞作家野呂邦暢と千歳……………渡辺 敏子
 キウス周堤墓群……………高橋 理
- 19号 (平成二十六年三月) 千歳における海軍地下壕等の戦後処理……………大野 明男／守屋 憲治
 千歳 恵庭岳におけるオリンピックの記憶……………守屋 憲治
 恵庭岳滑降コース緑化復元から四〇年……………先田 次雄
 支笏湖畔有料道路史……………大島 仁
- 20号 (平成二十六年十月) シマフクロウと千歳……………長谷川 充
 千歳原・第6回日本ジャンボリー……………守屋 憲治
 キウス周堤墓群と世界文化遺産……………田村 俊之
- 21号 (平成二十七年三月) 食が文化を育て、地域を育む……………中村由美子
 支笏湖モラップ山麓における植樹祭……………守屋 憲治
 なぜ今、『支笏湖歴史年表』か……………先田 次雄
 支笏湖歴史年表2015(『志古津』版)……………先田 次雄／守屋 憲治
- 『志古津』のバックナンバーについて
 千歳市ホームページですべて公開していますので、閲覧またはダウンロード(pdfファイル)が可能です。[志古津](#) [検索](#) [↑](#) 『志古津 過去からのメッセージ』に進むとバックナンバーの一覧を表示しています。

あとがき

平成十七年の『新千歳市史』機関誌「志古津」の発行は、多くの市民から資料と情報の提供を受けるとともに市史発行の啓発を目的にしたものだった。

平成二十二年春に七年の歳月を要して上巻が発行されたが、種々の事情から下巻発行にはしばらくの時間をおくということで編さん作業は一時棚上げとなってしまう。上巻発行最後の編さん委員会の席上、下巻棚上げとは別に「志古津」は有意義であり市の姿勢として発行を続けてもらいたいとの発言が多くあったことが会議録に残されている。

平成二十二年に早期退職し市史資料調査を担当して今年の春で五年が過ぎた。あつという間の五年間だった。上巻編さん委員の意見を受け、春と秋、一回にわたって「志古津」を発行し、市史編さんはあくまで休止で中止ではないことを市民と関係者に知らしめる役を全うすることができた。

「志古津」の発行で市民から資料の提供を受けるという側面は成果をあげることはできなかったが、自らの執筆を通してかなりの資料を集めることができた。また、「志古津」の配布希望も多く、多くの人が千歳の歴史に興味を抱いていることを知った。

この間、平成二十五年の議会決算特別委員会において市史に関する質問に対して理事者側の「課題を検討し、来年度に具体的なスケジュールを示した

い」との答弁で下巻に光明が射し、「志古津」を継続発行してきた甲斐があつたと感じた。

そして、今年五月に下巻編さん担当部署が新設された。組織が立ち上がって先ず、編さん業務を直営にするのか、委託にするのかの判断が待ち受けた。管内近隣の市では全面的に委託する傾向にあつた。千歳の戦後史Ⅱ連合国軍、自衛隊、交通体系の充実、自治体初の工場団地、アイヌ民族など他に例をみない独自の諸相は、千歳を深く理解する視点がなければ思い入れがなく平板なものになりはしないかを危惧した。結果、編さんは直営となった。

編さん項目の絞り込みと執筆者の選定に多くの時間を要するものと考えていたが、思いのほかスムーズに運んだ。これは四〇人にもなる執筆者の過半が市職員のOBと現職で、市史に対する理解があつたものと感慨もひとしおだった。市制施行六〇周年にあたる平成三十年度に向け自らのモチベーションをソフトアップし、伸びゆく千歳のまちづくりの指針となるような下巻の編さん作業を進めたい。

ところで、「志古津」は今号の発行を以て休刊となる。理由として、上巻に深く携わった経歴をもつ主幹以下三人の編さん担当は執筆に精力を傾けるというこのようだ。これまでの「志古津」へのご支援に感謝申し上げますとともに、下巻発行にあたって一層のご指導、ご助言を頂きたい。

(M)

志古津 第22号 (最終号)

『新千歳市史』機関誌

北海道千歳市東雲町二丁目三四番地

編集 千歳市総務部主幹(市史編さん担当)

TEL〇一三三(二四)〇五二三

FAX〇一三三(二二)八八五二

印刷 千歳印刷株式会社

北海道千歳市錦町三丁目三番地

TEL〇一三三(二三)二二二九